

「いんなん
してます。」

わだいのこうじ

— 112 —

法面緑化

道路脇の斜面にへばりついて作業をしているのは和生と地元の建設会社の技術者。和生と企業との法面(のりめん)緑化に関する共同研究の一コマです。

災害後の崩落現場などで法面を頑強なコンクリートで覆っている「山の痛々しい姿」をよく見ます。この姿を植物で覆うのが法面緑化。共同研究では、地域由来の植物による法面緑化ノウハウの確立に取り組んでいきます。

地域性植物を植え込む

「これは何が難しいのでしょうか? 経済と環境の両立は、お金と人々の多様な価値観が絡むためにとっても難しい。この難問に挑戦し、いわば人間社会と自然界との関係性を再生しようというのがこの共同研究なのです。」

高度経済成長期に国土のあちこちで道路や宅地が開発され、山を掘削するなど法面も大量に生まれました。この頃、「木と草によって早期・確実に、面的・立体的緑化を行い、環境・土地、景観保全を図る工法(日本緑化工学会HP)」として緑化工という言葉が生まれ

和歌山からの緑化技術

ました。そこで導入されたのが時期を問わず発芽し繁殖力が旺盛で安価な外来種の牧草でした。

外来種による緑化は、経済成長期におけるグローバル経済の中で主流となりました。この実験の共同研究者である和生の中島教授は30年前の学生時代、牧草が研究テーマでしたが「外来の牧草が周辺に悪影響を与えると聞いたことがなかっ

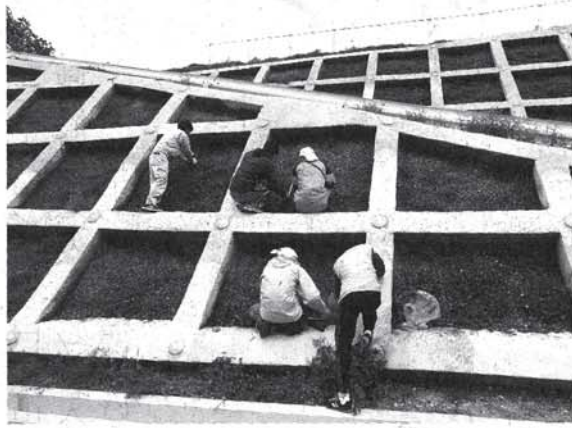
た」と言います。大量、画一化による効率が優先された時代だったので

ローカルからの挑戦

ところが牧草は家畜の飼料ですから、シカも大好物。シカを餌付けしているようなものです。シカに食い荒らされた法面は崩れやすく、また外来種に在来種が生息場所を奪われてしまう生態系への影響も出てきました。

その影響も出てきました。

地元企業との法面緑化共同実験



そこで今回注目したのが在来種のスキの導入です。スキはシカが嫌う植物。野生動物が食べないから野山に繁茂しているといえます。しかしスキの導入にも課題が

あります。労務費などコストの問題で、地元を生えている地域性種子は工事に即応して大量に調達することができません。また発芽に適した播種期と工事施工のタイミングが多くの場合一致しません。そこで、施行後に蒔種でき、かつ貴重な地域の種子を効率よく発芽させ、さらには社会が容認する範囲内のコストに押さえる緑化工の開発に取り組んでいるのです。

チームには日本を代表する緑化工技師も参加しています。彼は言います。「和歌山の種子で和歌山の生態系保全に貢献し獣害や災害からも守る技術を開発する」そして「和歌山モデルを他県にも応用したい」と。



工事では迅速、安価な方法が選ばれてきたからです。地域生態系に配慮した緑化工の和歌山モデルはおそらく和歌山の役割のモデルにもなるでしょう。「公」の視点の転換は、グローバルな経済に翻弄されないローカルな視点から始まります。目先の予算より僕らは後世への責任があるんだ、そんな意気込みで地道な研究に取り組む企業さん。斜面にへばりつき、土や種子と格闘し地元技術者が活躍する姿が「かっこいい」。夢のある仕事ではないか、と思った一日でした。

プロフィール



湯崎真梨子(ゆざき まりこ)
和歌山大学産学連携・研究支援センター 教授
専門は、農村社会学、地域再生学。自らが研究するだけでなく、地域と大学が共に成長するプロジェクト研究をコーディネートしている。